

京都

KYOTO

不思議ふしぎ!?

京都に隠れた意外な秘密を紹介します

仰天の寺標 飛び出した文字!?

歴史や文化、全てが源流へとたどり着く古都。京都を知ることには日本を理解すること。

京都好きを大好きに

京都 検定

京都・観光文化検定試験
京都商工会議所

早いもので今年もあと二ヶ月足らず、来月はもう十二月です。月が極まることから極月といい、また臘月ともいうのは中国では冬至の後、三番目の戌の日に獵で得た獣肉を神々に供え、これを「臘」と呼んだことからの呼称といわれます。

この月、禅寺の僧堂では「臘八大接心」という猛烈な修行が行われます。臘八、つまり十二月八日に釈迦が成道（悟りを得る）したことから、これにあやかり十二月一日から一週間不眠不休、横になることすら許されない壮絶な座禅三昧の修行を行なうのです。

雲水にとつてまさに命懸けの真剣勝負、悟りを得た禅僧の境涯はこのような激烈な修行の果てに生まれるものなのです。

禅僧の境涯については是非皆さんに御覧いただきたいのが昭和三十四年、開山六百年遠諱の記念に建立された妙心寺南門の寺標です。最初に見たとき目を疑い、そして感動しました。文字が石の左右に飛び出してしまっているのです。文字の揮毫者は当時の妙心寺派管長・古川大航老師。九十八歳で示寂（死去）した禅僧の九十歳の時の書です。

通常文字が紙をはみ出したら書き直すものです。しかしはみ出そうが足りなからうがお構いなし、乾坤一擲、この瞬間に込めた気合はこの文字にこそ生きているのです。ここには揮毫した禅僧の力が漲っています。しかし書いた人も人なら、はみ出した標号をそのまま彫った石工も石工、さらにこの寺標をそのまま入口に建てた寺もまた寺です。この石標には書いた禅僧と彫った石工と建てた寺院、三者の進る禅機が響き合っています。これを本物というのです。

「法臘」という言葉をご存じでしょうか。僧侶、特に禅僧の年齢を指す言葉ですが、僧侶が得度してからの年数をいいます。生まれてからではなく、仏門に入ってから修行を積んだ歳月こそ僧侶の年齢なのです。

十二月、茶席の床の間には「看々臘月尽」の禅語が掛けられます。「看よ看よ臘月尽く」みるみるうちに今年も終わってしまうぞ、という戒め。「師走」はやるべきことを為し遂げたという「為果つ」が語源という説もあります。どうか皆さまも悔いのない月日を過され、よいお年をお迎えください。

（京都学園大学非常勤講師 堤勇二）



妙心寺南門の寺標



左右にはみ出した文字



そのまま彫られた石標



「看々臘月尽」の茶掛例